

#### 4) オキナグサ＝翁草

オキナグサはキンポウゲ科の多年草で、本州以南の陽当たりのよい草原に自生する。この仲間は前述の節分草や福寿草、後述するオダマキなど美しい花のものが多い。このオキナグサも春4月頃、径3～5cm ぐらゐの美しい花を上向きにつける。しかし花に見えるのは6枚の萼片で、その外側は白い羽毛で覆われている。そして花が終わってしばらくすると、この花がなぜ翁草かがわかる。花柱の先の方がまるで老人の油っ気のぬけた髪の毛のように、ボサボサになってしまい、何とも巧みなネーミングだったのである。このボサボサ髪は風で種子が遠くに飛ぶように配慮されたものである。種子を取り出して10月頃に蒔いておけば3年目で花が咲く。野生種は暗褐色の花であるのに対して、園芸品種には紅、紫、黄色、白などもあり1株400～500円ぐらゐで手に入る。陽当たりに植えておけば毎年花を着けるが、水はけが悪いと全体が腐ってしまうことも多いので、要注意である。しかし茎はことのほか大きくなって、40～50cmにも達する。別称としてオジノヒゲ、ウバシラガ、シラガハシ、ユーレイバナなど種子の形を例えたものが多く、そこが翁草たる所以といえようか。学名は『*Pulsatilla cernua*』で、上を向いて咲く釣鐘状の花をイメージして命名されたものである。また中国では『白頭翁』と呼ばれている。オキナグサの直根は地中にまっすぐに伸びる。この根茎を乾燥させたものを漢方では『白頭翁』といい、月経不順や下痢・腹痛などに効果があるとされている。しかし皮膚や粘膜を強く刺激する物質が含まれているので、取り扱いには注意を要する。

『万葉集』では「根っ子草」として1首が詠まれている。

芝付きの三浦崎なる根っ子草 逢ひ見ずあらば吾(ア)恋めやも

と翁草を恋人に例えて、もし逢うことがなかったら恋に落ちることもなかったのに、と嘆いているのである。

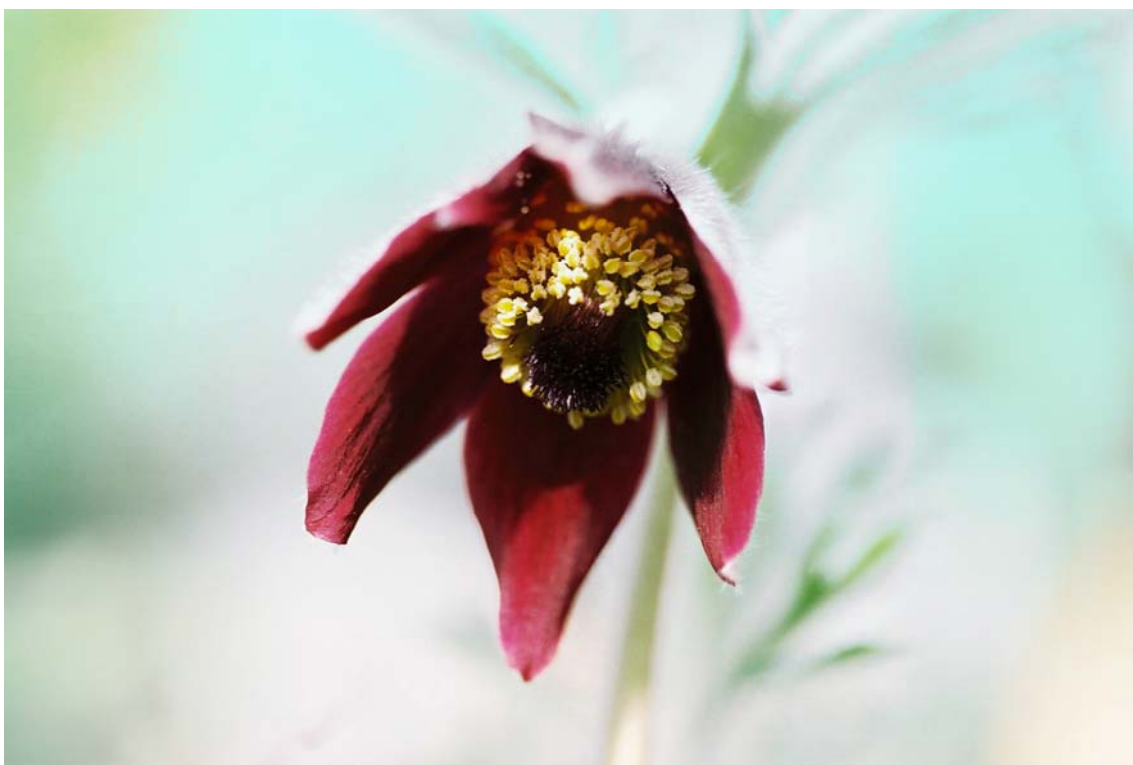
かの宮沢賢治はオキナグサが好みだったと見えて、短編集『オキナグサ』の中では、この花に魅せられた山男のことが語られている。彼は盛岡高等農林学校に学び、ガーデニングの基礎を習得するが、さまざまな分野で才能を発揮した。花巻農学校の教師になってからは『花壇工作』という授業を行ない、大正末期から昭和初期にかけて、たくさんの西洋花壇を設計している。花巻温泉遊園地では、南斜花壇の設計企画書の中で『鈴蘭とオキナグサとを繁殖させて、[中略]北上山地の景観を成したいと思います。』と記しており、この花との関わりを垣間見ることができる。賢治はまた横浜の種苗会社『横浜植木』を通して、イギリスの『サットン商会』から西洋種の植物を多数輸入している。彼が遺した『メモフローラノート』『メモフローラ手帳』にはムスカリヤ、クロッカス、シラー、アネモネ、デージー、などの名前が記されている。当時の旧帝国図書館にも出かけていたようで、海外の文献を探したりしていた。また彼が主宰した文芸誌の名前が『アゼリア』(azarea＝ツツジの英語名)であったことも興味深い。



オキナグサの花は、岩手県が生んだ詩人、宮沢賢治が愛した花でもある(栽培品)。



さまざまな色を楽しむことが出来るオキナグサの花。直根が深く張るために、『万葉集』では根っ子草、中国では白頭翁で、漢方では大事な薬草である(栽培品)。



エンジ色のオキナグサの花(栽培品)。



オキナグサの花は、エンジ系統と、ブルー系統の花が多いが、色合いは少しずつ異なっており、花形も個体によって幾分違う。そこがまた楽しいところである(栽培品)。



オキナグサは花が終わると、なるほどオキナグサ(白頭翁)だと納得できる。

[目次に戻る](#)